

### 目次

- ・ ご挨拶……塩路昌宏 (pp.1-3)
- ・ 平成31年度京機会総会報告……黒瀬良一 (pp.4-6)
- ・ 平成31年度京機会総会懇親会報告……小森雅晴 (p.7)
- ・ 平成31年度京機会役員…… (p.8)
- ・ 京機会学生企画「先輩に学ぶ」……石原啓基 (pp.9-11)
- ・ S42関東同期会……長崎 啓・藤川卓爾 (p.12)
- ・ 昭和48年卒同期会報告……成宮 明・増本雄治 (p.13)
- ・ 関東支部写真同好会 第18回撮影会(2018年11月3日)の報告……山下真司 (pp.14-15)
- ・ 淡路島紀行(その6) 高田屋嘉兵衛公園……藤川卓爾 (pp.16-22)
- ・ ウエスティングハウス社とアメリカ合衆国の思い出(8)……中谷 博 (pp.23-31)



### ご挨拶

塩路昌宏 (S50/1975卒)



2018年11月10日開催の平成31年度京機会総会にて会長を拝命しました。皆様方のご支援を受けて、私なりに精一杯努めさせていただきます。

折りしも、機械系教室創立100年を経て、第2世紀の始まりを機に活性化した新京機会が誕生して21年目に入ります。

私は、ちょうど新京機会が発足し年会費制度へ移行する際の会計を担当しました。如何にして新システムを会員の皆様にご理解いただき、メリットを感じていただけるかを、初代会長の久保先生をはじめ、関係する教員やサポートいただけるOBの方々と話し合ったのを記憶しています。その後、運営組織の構築、支部の創設、第2世紀事業との連携、若手の参画促進、学生への支援、等の様々な取り組みを経て、今や学科の同窓会として日本一ともいえる事業を展開しています。この間にご尽力いただいた多くの方々に敬意を表するとともに、最初に関わらせていただいた者として、たいへん嬉しく思っています。機械系の広報レターとして重要な意味を持つ京機短信も、久保先生と吉田さんの多大なるお骨折りでNo.320を数えるに至り、まさに感謝しかありません。

しかし、当然の事ながら社会の動きにも対応する必要があります。最近では、我が国の基幹産業である自動車の世界にも電動化の波が押し寄せ、材料・生産加工・制御技術の高度化とAI技術や情報・通信分野の画期的な進展が歩調を合わせて進行しています。そこに、物・サービス・場所などを多くの人と共有・交換して利用する、いわゆるシェアリングエコノミーと呼ばれる社会的な仕組みが加わって、100年に一度とも言われる大変革を迎えています。この動きが、世界各国の政府や経済界・産業界の思惑と相俟って、グローバルに拡大していることは周知の通りです。

機械工学は言うまでもなくモノづくりの学問ですが、システムが異分野と融合して複合化・多元化する中で、設計の手法や考え方も、必要とされる知識も大きく変貌せざるを得ません。異分野の知識・情報を取り入れた新規な発想が求められ、これまで以上にコトづくりのセンスが要求されるとともに、様々なネットワークの重要性が益々高まっています。京機会は、120年を超える長い歴史を持ち、1万人を超える卒業生・修了生を輩出した機械系教室の同窓会として、膨大な人的ネットワークを有しています。現代の社会変革の荒波の中で、同門の朋との広範かつ活発な交流を通じて、同窓会の役割を発揮できると考えています。

以上の状況を踏まえて、今後も京機会が同窓会としてサステナブルに発展していくためには、今、何をすべきかを検討することも大切でしょう。とくに、若い人にメリットを感じてもらい、活躍の場を提供することが、次世代に繋がることは言うまでもありません。今後とも、皆さんのお知恵とご支援・ご協力をいただきたく存じます。

ところで、最近、ビジネス書大賞2017を受賞したサピエンス全史を読みました。20万年前に東アフリカで進化したホモ・サピエンスは、7万年前の認知革命により膨大な量の情報を収集・保存・伝達する能力を獲得し、虚構のヒエラルキーを信じることで、国家単位での社会を構築できたとされます。その結果、新しい土地へ移動するたびにサピエンス以外の全ての先住人を破滅させ、生態系そのものを変えて、ほとんどの動物を絶滅させたとのこと。身体能力で優越するネアンデルタール人や、はるかに大きなサイズの動物も例外ではありませんでした。今は生物多様性が謳われていますが、これまでの業の深さに戦くとともに、多くの犠牲の上に繁栄があることを忘れてはなりません。

直接的なコミュニケーションでまとまる集団の自然な大きさの上限は約150人と言われ、それを超える人数では親密にお互いを知ることが出来ないとされています。絶滅したネアンデルタール人も、かなり高度な言語技能を有し、安定した集団を形成していたようですが、それ以上に大きな社会を形成できませんでした。サピエンスとの決定的な違いは、虚構の言葉・概念・思想・宗教を信じ合える能力の有無です。同じ京機会に所属している同窓と判れば、全く初対面の人でも突然親しみが沸き、協力できる雰囲気醸成されます。これが、まさに同窓会という虚構の力です。虚構というと、何か騙しているようで聞こえが悪いので、長い時間を掛けて築き上げてきた信頼の力であり、連帯意識の源です。この力を強化して、京機会の会員同士の絆をさらに深めることが、サステナブルに近づく一つの方法のようにも思えます。

来年には30年余り続いた平成が終わります。新しい元号のもと、新たな気分で京機会活動を盛り立て、微力ながら活性化のためにお役に立てるよう努めてまいり所存です。皆様のご支援・ご協力を重ねてお願いします。

## 平成31年度京機会総会報告

黒瀬良一（H5/1993卒）

日 時：平成30年11月10日（土）

会 場：京都大学吉田キャンパス

幹事会：物理系校舎312室（出席者41名）

総 会：物理系校舎313室（出席者98名）

学生企画「先輩に学ぶ」：物理系校舎315室（出席者60名）

講演会：時計台百周年記念会館 百周年記念ホール（出席者140名＋学生多数）

懇親会：時計台百周年記念会館 国際交流ホールⅠ、Ⅱ（出席者108名）

平成31年度京機会総会は、11月10日（土）に京都大学の吉田キャンパスにある、物理系校舎、百周年記念館ホール、及び国際交流ホールにて開催されました。参加者は、ご家族も含め、総勢152名でした。また、今回は登録不要の形で技術講演会には、多数の学生会員が参加しました。

### 全体幹事会

幹事会では、会計の報告と新役員候補の紹介がなされ、総会への提出が承認されました。また、京機会活動に関する意見が紹介され、活発な意見交換が行われました。



### 総会

平成31年度総会は、蓮尾昌裕代表幹事（S60/1985）の司会によって行われました。中村吉伸会長（S48/1973）の挨拶で始まり、続いて、榎木哲夫工学研究科副研究科長（S56/1981）より教室の現状報告がなされました。その後、新任教員、昇任教員4名の紹介が行われました。



平成30年度の活動報告では、各支部の協力による工場見学の実施、脇坂資金による学生の留学補助、学生と先輩の交流会、学生フォーミュラー活動、社会貢献の取り組み（小学校への出張講義）、ニュースレターなどが紹介されました。続いて、平成30年度決算報告があり、小谷重遠氏（S44/1969）による監査報告がおこなわれ、承認されました。



次に、役員改選の結果が報告され（詳細は8ページに記載）、新会長となる塩路昌宏氏（S50/1975）の挨拶が行われました。その後、平成31年度の活動予定および予算が紹介され、予算が承認されました。

支部報告では、関西、関東、中部、中国四国、九州、それぞれの支部が、それぞれの特色を生かした活動の報告が行われました。関西支部では、産学懇話会、異業種交流会、京機カフェなどの取り組み、および会費徴収率改善の試みなどが紹介されました。関東支部では、異業種交流会、工場見学会、ゴルフ同好会、若手幹事会の活動などが紹介されました。中部支部では、「モノづくり。MADE in 中部」、「中部発 匠の技術」などが紹介されました。中国四国支部では、役員連絡会・会員交流会、異業種交流会の活動などが報告されました。九州支部では、小学校や高校への出張講義や、工場見学会の活動などが紹介されました。最後に、東北の会の活動概要が簡単に報告されました。



## 特別講演会

特別講演では、「ロボティクスの可能性と限界」と題して、浅田春比古氏（S48/1973）、マサチューセッツ工科大学教授）より講演がありました。講演では、ロボティクスの研究分野が発展し、暮しや将来の社会の在り方まで影響を及ぼすようになった現状や、今後の飛躍・進展の可能性、課題、限界について、MITで開発されたユニークなロボットを紹介しつつ、お話されました。講演は在学生の参加も多く、「ロボットだけでなく人も学習することが重要という考えに至ったのはどうしてか?」、「独創的なアイデアを出すうえで大事なことは何か?」などの質問も出て、大変盛況でした。



## 平成31年度京機会総会懇親会報告

小森雅晴（H7/1995卒）

会場を国際交流ホールに移して、西脇眞二代表副幹事（S61/1986）の司会で懇親会を開催しました。最初に京機会の平成30年度の年間活動において顕著なご尽力をいただいた並木宏徳氏（S44/1969）ならびに支部推薦の4名、1組への表彰が行われました。ご欠席の受賞者については、各支部からの代理の方に賞状を受領いただきました。塩路昌宏新会長（S50/1975）にご挨拶いただいた後、下間頼一氏（S25）の乾杯のご発声により、会が始まりました。しばしの歓談の後、KARTからの本年度活動報告があり、その後、「琵琶湖周航の歌」を参加者全員で合唱しました。最後に、杉江俊治氏（S51/1976）よりご挨拶をいただき、総会が終了しました。



役 職	氏 名	卒業年次	所 属
【会長】	塩路 昌宏◎	昭50年	京都大学名誉教授
【副会長】 教室側代表	北村 隆行	昭52年	京都大学大学院 工学研究科 機械理工学専攻 教授
関西支部	成宮 明◎	昭48年	応用科学研究所
関東支部	山本 謙◎	昭50年	宇部興産(株)代表取締役会長兼社長
中部支部	三輪 邦彦◎	昭57年	(元)ヤマハ発動機(株)
中国・四国支部	田中善一郎◎	昭57年	(株)JR四国ホテルズ 代表取締役社長
九州支部	千々木 亨◎	昭54年	西日本ペットボトルリサイクル(株)代表取締役社長
学生会	長崎 意尚	平30年	京都大学大学院 工学研究科 機械理工学専攻 修士1回生
【監事】	小谷 重遠◎ 鴻野雄一郎◎ 森 雅彦◎	昭44年 昭44年 昭60年	(元)(株)神戸製鋼所 (元)(株)住友電気工業 (株)森精機製作所 代表取締役社長
【代表幹事】	蓮尾 昌裕	昭61年	京都大学大学院 工学研究科 機械理工学専攻 教授
【代表幹事】副幹事	西脇 眞二	昭61年	京都大学大学院 工学研究科 機械理工学専攻 教授
【会計担当】正幹事	鈴木 基史	昭61年	京都大学大学院 工学研究科 マイクロエンジニアリング専攻 教授
【会計担当】副幹事	平方 寛之	平 9年	京都大学大学院 工学研究科 機械理工学専攻 教授
【常任幹事】			
地区代表幹事 (関西)	上田 雅人◎	平 3年	(株)島津製作所
〃 (関東)	渡邊明規雄◎	昭61年	日産自動車(株)
〃 (中部)	今村 隆昭◎	平 2年	ヤマハ発動機(株)
〃 (中国・四国)	白崎 琢也◎	平14年	JFEスチール(株)
〃 (九州)	泉屋 亨◎	平 5年	新日鉄住金エンジニアリング(株)
大学側幹事 (機械系)	北條 正樹	昭54年	京都大学大学院 工学研究科 機械理工学専攻 教授
大学側幹事 (情報)	大塚 敏之	平 2年	京都大学大学院 情報学研究科 システム科学専攻 教授
大学側幹事 (エネルギー)	星出 敏彦	昭52年	京都大学大学院 エネルギー科学研究科 エネルギー変換科学専攻 教授
〃 (関西支部担当) 正幹事	平方 寛之	平 9年	京都大学大学院 工学研究科 機械理工学専攻 教授
〃 (関西支部担当) 副幹事	松原 厚	昭60年	京都大学大学院 工学研究科 マイクロエンジニアリング専攻 教授
〃 (関東支部担当) 正幹事	吉田 英生	昭53年	京都大学大学院 工学研究科 航空宇宙工学専攻 教授
〃 (関東支部担当) 副幹事	小森 雅晴	平 7年	京都大学大学院 工学研究科 機械理工学専攻 教授
〃 (中部支部担当) 正幹事	西脇 眞二	昭61年	京都大学大学院 工学研究科 機械理工学専攻 教授
〃 (中部支部担当) 副幹事	井上 康博	平10年	京都大学大学院 再生医科学研究所 准教授
〃 (中国・四国支部担当) 正幹事	琵琶 志朗	平 2年	京都大学大学院 工学研究科 航空宇宙工学専攻 教授
〃 (中国・四国支部担当) 副幹事	花崎 秀史	昭59年	京都大学大学院 工学研究科 機械理工学専攻 教授
〃 (九州支部担当) 正幹事	黒瀬 良一	平 5年	京都大学 大学院工学研究科 機械理工学専攻 教授
〃 (九州支部担当) 副幹事	河野 大輔	平17年	京都大学大学院 工学研究科 マイクロエンジニアリング専攻 准教授
〃 (名簿担当)	四竈 泰一	平14年	京都大学大学院 工学研究科 機械理工学専攻 准教授
〃 (ニュース担当) 正幹事	富田 直秀	昭54年	京都大学大学院 工学研究科 機械理工学専攻 教授
〃 (ニュース担当) 副幹事	黒瀬 良一	平 5年	京都大学 大学院工学研究科 機械理工学専攻 教授
〃 (通信・情報・セキュリティ担当) 正幹事	野中 鉄也	昭55年	京都大学大学院 工学研究科 機械理工学専攻 助教
〃 (通信・情報・セキュリティ担当) 副幹事	巽 和也	平 9年	京都大学大学院 工学研究科 機械理工学専攻 准教授
〃 (学生会担当)	岩井 裕	平 5年	京都大学大学院 工学研究科 航空宇宙工学専攻 准教授
〃 (学生会担当)	松田 直樹	平22年	京都大学大学院 工学研究科機械理工学専攻 助教
〃 (学生会担当)	名村今日子	平22年	京都大学大学院 工学研究科マイクロエンジニアリング専攻 助教
学生会幹事	石原 啓基	平30年	京都大学大学院 工学研究科 機械理工学専攻 修士1回生
【顧問】	久保 愛三◎ 藤川 卓爾◎ 松久 寛◎ 中村 吉伸◎	昭41年 昭42年 昭45年 昭48年	京都大学名誉教授 (元)三菱重工業(株) 京都大学名誉教授 住友重機械工業(株)会長
【運営委員会】	北條 正樹(兼) <委員長> 久保 愛三◎、松久 寛◎、成宮 明◎、熊澤 正博◎(昭43)、三輪 邦彦◎、田中善一郎◎、千々木 亨◎、榎木 哲夫(昭56)、松原 厚、鈴木 基史、蓮尾 昌裕、西脇 眞二		
【事務局】	段 智子、山口 美賀◎(平15)		

は新任

## 京機会学生企画「先輩に学ぶ」

石原啓基（H30/2018卒、SMILE）



平成30年11月10日（土）14時20分～15時40分に京機会学生企画「先輩に学ぶ」を開催いたしました。

わたしたち現役学生は、「一つの企業に定年退職まで勤め上げる」というキャリアが、必ずしも代表的なキャリア選択ではなくなりつつある事実に向き合っています。機械、自動車、重工業、家電など名だたる機械系メーカーにおいて貢献してこられた先輩方の背中を追うことも魅力的ではありますが、大学院で習得した機械工学、物理工学の知見を一所に留まらず、多様な業種、多様な分野に貢献し続ける新たなキャリアパスについても、想定しておく必要があると考えています。

本企画では多様なキャリアパスを歩まれた4人の先輩方をお呼びし、座談形式でキャリアについて議論し、多様な働き方を想定できるようにしました。

### 1. 登壇者の紹介（20分 315講義室）

最初の20分は登壇者の方に一人5分程度で自己紹介を行っていただきました。以下に4名の登壇者の方々の紹介とその様子を示します。

#### 楠浦 崇央（くすうら たかひさ）様

京都大学工学部物理工学科卒（1995年）

同大学院修了後、川崎重工にてオートバイのエンジン開発、小松製作所で新規事業開発を担当し、研究開発ベンチャー設立（CTO／事業責任者）。2008年にTechnoProducer 株式会社設立（代表取締役）。京都府出身／46歳。座右の銘は「確信犯」。



#### 徳田 貴司（とくだ たかし）様

京都大学工学部物理工学科卒（2003年）

同大学院修了後、家電メーカーに勤務後、2016年株式会社Keiganを設立し、KeiganMotorの開発販売を行う。総務省異能vation（独創的な人特別枠）第一回本採択者。けいはんなベンチャービジネスチャンピオンシップ総合優勝。



**可知 直芳（かち なおよし）様**

京都大学工学部物理工学科卒（2004年）

同大学院博士課程修了後、2011年にCONNEXX SYSTEMS株式会社に入社（創業メンバー）。重量車EV、無人飛行体等向けバッテリー開発などを担当。現在はCONNEXX SYSTEMS株式会社 研究開発本部 開発企画室長。

**米倉 悦子（よねくら えつこ）様**

京都大学工学部物理工学科卒（2010年）

大学卒業後、航空管制官になるべく国土交通省に入省。入省後は1年間の研修を経て、羽田空港の航空管制官として5年間勤務。その後、弁理士を志し、転職をし、現在は特許事務所にて勤務。

**2. 座談会（25分×2 214・215会議室）**

座談会では登壇者の周りを囲む形で、現在のキャリアを選ばれた理由や苦勞、今学生がすべきことなど非常に有益な話を聞くことができました。

私が座談に参加した範囲で特に記憶に残っているものを紹介します。**楠浦様**は、学生のうちに身に付けておくべきスキルとして、プログラミングと投資、特許を読めるようになるということを挙げられました。これらのスキルは新たなアイデアを生み出してカタチにする際にどれも必要なものであるとのことで、今すべきことが非常に明確になりました。**徳田様**は、学生時代の研究でプログラムを覚えることを面倒に思って手作業をしていたが、時間をかけてでも何かスキルを身に着けることに意義があるという話をされて、自分の研究や物事への取り組み方にも当てはまり、意識が変わりました。**可知様**は、スタートアップの会社のメリットとデメリットを話されて、自由度がある楽しさとその代わりに全てやらなくてはいけないという苦勞を聞くことができました。**米倉様**は、航空管制官の仕事から弁理士を目指すきっかけとなった長期のキャリア形成に関して話されて、働くということを長期の視点で考える良いきっかけとなりました。

約50分の座談会の間で静かになる時間は無く、各登壇者の座談で非常に積極的に議論がなされており、本企画の実行責任者として達成感を感じ非常に嬉しく思いました。



最後に、本企画を実施するにあたって協力していただいた、[京機会スマイル](#)関係者を始めとする多くの方々と本企画の要である登壇者の皆様に、紙面を借りてお礼申し上げます。誠にありがとうございました。

## S42関東同期会

長崎 啓・藤川卓爾 (S42/1967卒)

本年もS42卒関東同期会 愛称「金時会」が春と秋に開催されました。春は15人、秋は12人集まりました。秋の会では健康の件、運転免許証更新・返上の件、旅行や山歩きの件が話題になりました。来春の予定は5月17日(金)としました。



### 6月8日 春の「金時会」

長崎 啓、若園 修、安藤研治、西村喜之、渡邊光寛、小野隆士、間瀬俊明、平尾 隆、側島克信  
中野善文、前野幹彦、林 正広、元木敏雄、樽村 勝、岡毅 遥



### 11月9日 秋の「金時会」

樽村 勝、岡毅 遥、安藤研治、前野幹彦、側島克信、平尾 隆、長崎 啓  
林 正広、古川 遵、藤川卓爾、元木敏雄、小野隆士

## 昭和48年卒同期会報告

成宮 明・増本雄治（S48/1973卒）

去る9/30～10/1、1泊2日で昭和48年卒同期会を開催し旧交を温めました。5年ぶりの同期会で17名が京都白河院に集まりました。今回は1日目午後に台風24号が京都近くに到来、新幹線やJR線などが計画運休する事態の台風真っ只中での懇親会となり、記憶にしっかり残る同期会になりました。台風でドタキャンとなった方も多い中、気合いの入った17名が集まったわけです。1日目は午後台風到来で交通機関が運休になったため却って集合時間が早くなり、その結果、幸いにも、計画外の本番懇親会前0次会（？）も楽しむことができ、続けて、台風真っ只中の本番懇親会そして2次会、結局、10時間におよぶ大宴会となりました。2日目は見学組とゴルフ組に分かれ、見学組は旧三井家別邸と島津製作所創業記念資料館を見学、ゴルフ組は瀬田ゴルフコースでゴルフを堪能、絶好の日和で台風はどこぞやという幸運でした。幹事もハラハラドキドキの連続でしたが、無謀な（？）決行決断も大変運良くラッキーな結果となり、ホッと胸を撫で下ろしたところです。5年後に再会を誓って散会しました。



四柳 繁、寺本徹夫、土井公明、三澤吉次、丸山 信、笹田 滋、加藤重幸、江崎正隆、福田博明、増本雄治  
成宮 明、大築康生、藤谷 誠、和仁正文、吉里 勉、鶴田和博、吉村裕司

## 関東支部写真同好会 第18回撮影会（2018年11月3日）の報告

山下真司（S63/1988卒）

秋の写真同好会は、11月3日（土）に西鎌倉の長谷寺と鎌倉大仏に撮影に行きました。撮影ポイントが多く、参加者は思い思いの被写体の撮影を楽しみました。今回は江上様の奥様にも参加いただき、とても楽しい撮影会となりました。



浅野保夫、中村 定、増本雄治  
山下真司、江上令夫人、江上秀男

作品の一部を紹介いたします。



「秋の空を泳ぐ 鎌倉長谷寺」中村 定さん(S44/1969)



増本雄治さん(S48/1973)



「好奇心」江上秀男さん(S44/1969) 「ふ ふ ふ」浅野保夫さん(S44/1969)



「長谷駅到着」山下真司(S63/1988)

過去の作品も紹介しておりますので、写真同好会報告ページもご覧ください。

[http://www.keikikai.jp/shibu/kantou/katudou\\_ichiran/s-shashin.html](http://www.keikikai.jp/shibu/kantou/katudou_ichiran/s-shashin.html)

## 淡路島紀行（その6）高田屋嘉兵衛公園

藤川卓爾（S42/1967/長尾研卒） [takuji-f@gsc.gr.jp](mailto:takuji-f@gsc.gr.jp)

淡路島の西海岸の中程から少し南の洲本市五色町都志（つし）にウエルネスパーク五色・高田屋嘉兵衛公園があります。この公園は都志出身の江戸時代後期の海商高田屋嘉兵衛の顕彰を目的として彼が埋葬されている播磨灘を一望する丘陵に開設された総合公園です。園内には高田屋嘉兵衛の功績を紹介する博物館 高田屋顕彰館・歴史文化資料館「菜の花ホール」をはじめ、温泉入浴施設「ゆーゆーファイブ」、公共の宿・レストラン「浜千鳥」、ログハウス、オートキャンプ場、スポーツ施設等があります（写真1、図1）。



写真1 ウエルネスパーク五色・高田屋嘉兵衛公園全景

<出典： <http://www.takataya.jp/>>



図1 ウエルネスパーク五色・高田屋嘉兵衛公園マップ

以下は<斉藤智之、「高田屋嘉兵衛翁伝」、高田屋顕彰館・歴史文化資料館>（写真2）の高田屋嘉兵衛関係年表からの抜粋です。

高田屋嘉兵衛は明和6（1769）年に都志で生まれました。ナポレオンがコルシカ島で生まれたのと同じ年です。7歳の頃に都志川の河口で潮の干満時刻を調べて周りの人を驚かせたといひます。22歳で兵庫に出て樽回船の水主（かこ）として働きました。24歳でふさと所帯を持ちました。この頃水主から表仕（船の進路を指揮する役）に、翌年、沖船頭（雇われ船頭）に出世しました。26歳のときに紀州熊野沖で大規模な鰹漁を行っています。自分の船を持つための資金稼ぎだったと思われまひます。27歳で和泉屋伊兵衛の船に乗って初めて出羽国酒田に航海しました。

28歳の時に辰悦丸が完成、念願の持ち船船頭になり箱館（現在の函館）交易を始めます。高田屋の屋号を公称しました。翌年の正月に太陽が北海から昇る夢を見て北海雄飛の決意を新たにします。この時、嘉兵衛の弟2人も同じ夢を見たといひます。翌年30歳で箱館に出店しました。31歳の時に幕府の蝦夷地御用御雇となり、近藤重蔵に従って国後～択捉島間の航路を開拓しました。33歳の時に幕府から蝦夷地定雇船頭を命じられ苗字帯刀を許されました。35歳の時には淡路・兵庫から蛤・蜆・鯉・鮎・鰻などを箱館地区に移殖、撰津の松・杉苗を箱館山に移植しました。

38歳の時に幕府から蝦夷地御用取扱人に指名されました。箱館大火で自店を焼失しましたが、私財を投じて被災者へ米・銭・古着などを供与し、長屋を建てるなど救援活動を行いました。42歳の時に幕府から択捉場所の請負を命じられました。文化9（1812）年8月、44歳の時に択捉島から箱館へ向かう途中にロシアのディアナ号に拿捕されカムチャッカに連行され、抑留生活が始まりましたが、嘉兵衛とリコルドの協議により翌年9月にゴロヴニン事件が無事解決しました。50歳の時に病氣養生のため故郷の都志に帰り、文政10（1827）年に59歳で亡くなるまで灌漑用川池築造・港湾改修工事の寄付をするなど故郷への多大な貢献をしました。

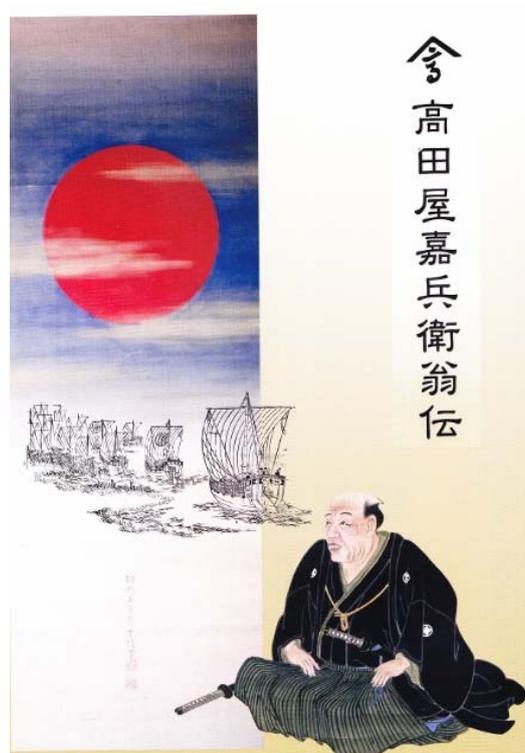


写真2 「高田屋嘉兵衛翁伝」

高田屋嘉兵衛の生涯は司馬遼太郎さんの「菜の花の沖」に描かれています。司馬遼太郎さんは、江戸時代を通じて誰が一番偉かったかという、学者、大名、発明家いろいろ出た中で高田屋嘉兵衛だと思っております。嘉兵衛は船乗りとしての技術、商人としての才覚に優れていたのはもちろんですが、何と云ってもゴロヴニン事件の解決を導いた嘉兵衛の人間性と外交感覚を評価してのことだと思います。

嘉兵衛は私財を投じて箱館の基盤整備事業を実施し、造船所を建設して箱館の町の発展に貢献しましたので「箱館発展の恩人」と称されています。函館市には高田屋嘉兵衛資料館や嘉兵衛の銅像が建てられています（写真3）。



写真3 函館市の高田屋嘉兵衛銅像

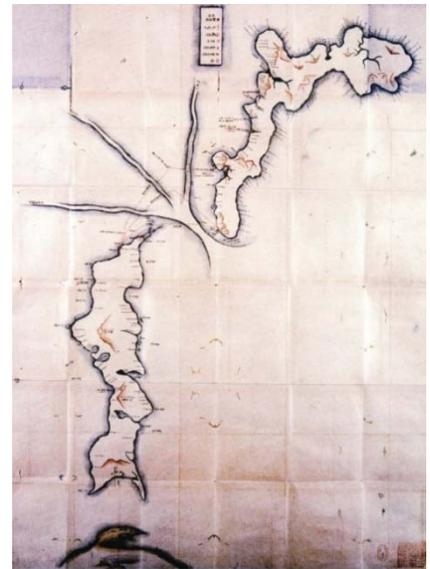


図2 国後～択捉航路

<<https://www.hakobura.jp/db/db-view/120823x13.jpg>> <出典：「高田屋嘉兵衛翁伝」>

毎年8月15日に都志で開催される夏祭りは「高田屋祭り」と称され、函館市からも関係者が来ます。

船乗りとして航海術にたけた嘉兵衛は国後島（図2の左下側）と択捉島（同右上側）の間の航路を開拓しました。両島の間は3つの海流が合流して強い流れとなり海の難所となっていました。嘉兵衛は潮の流れをよく観察して、最短距離を避けて先ず北に進みそれから東に変針して3つの海流を1つずつ乗り越えて択捉島に向かうという新しい航路を開拓しました。

嘉兵衛の乗った船は「北前船」です。高田屋嘉兵衛公園の「菜の花ホール」（写真4）には嘉兵衛の最初の持ち船「辰悦丸」の模型が展示されています（写真5）。



写真4 菜の花ホール



写真5 辰悦丸の模型

「北前船」は江戸時代中期から明治時代にかけて大坂から瀬戸内海、関門海峡を通り日本海沿岸を經由して蝦夷地の箱館まで往復しました。下り荷は蝦夷地の人々への飲食品（米や酒、砂糖）、瀬戸内海各地の塩（漁獲物の塩漬けに不可欠）、日常生活品（衣服や煙草、紙、瀬戸内沿岸産の蠟燭）、藁（わら）製品（縄や筵）などでした。上り荷は殆どが海産物で、下り荷ほど種類は多くありません。鯨粕（商品作物栽培のための肥料）、数の子、身欠き鯨、干しナマコ、昆布、干鰯などでした。

江戸時代の中期になると綿花、イグサ、藍などの換金作物の栽培が瀬戸内一帯で広がり肥料の需要が高まりました。一方、九十九里浜など、それまで魚肥となる鰯の大量供給地でも水田開発が進んで地元需要が増大し、西日本へ運ばれなくなりました。そこで鰯に代わる魚肥となったのが鯨です。18世紀に入ると、鯨を煮て魚油を絞った残り粕を肥料にする技術が生まれ、鯨粕を大量に供給できるようになりました。「北前船」が日本の農業を変えたと言われています。

「北前船」は荷物を運ぶ運賃を利益とするのではなく、船主が自分の才覚で荷を買い集め、寄港地で売りさばく今日の「商社」のような経営手法を特色としました。江戸時代のように商品の地域間価格差が大きくかつ情報の速度が遅い時代は「北前船」が一航海するだけで千両（現在の1億円）の利益を上げることが可能であったといわれています。しかし、明治中期になると、鉄道が普及したこと、北海道の鯨が減ったこと、情報の速度が上がって取引のうまみがなくなったこと等が相俟って「北前船」の役割が消えて行きました。

ゴロヴニン事件の顛末は次のようです。〈参考：「高田屋嘉兵衛翁伝」〉

ロシアは18世紀初期から黒貂（てん）などの毛皮類を追ってシベリアから千島列島を南下し始め、活動が盛んになるにつれて物質補給地、交易地として日本との関係構築を模索してきました。寛政4（1792）年、ロシア使節ラスクマンが根室に来航しましたが、日本側はこの問題は長崎でのみ交渉しうるとして信牌（長崎入港許可証）を与えて帰国させました。ロシア国内外事情による空白期を経て文化元（1804）年にレザノフが長崎に来航しましたが、半年間港口で待たされた挙句通商の申し出は拒否されました。レザノフは鎖国日本の扉を開けるには武力しかないと考え、中央政府の許可を得ることなく部下のフヴォストフに命じて文化3（1806）年から翌年にかけてサハリンや択捉島や利尻島を攻撃させました。

文化8（1811）年、ロシア船ディアナ号が国後島で水、食料の補給を得ようとゴロヴニン艦長以下8名が上陸して日本側と交渉しようとしたのですが、厳戒態勢にあった警備隊に捕虜として捕らえられ箱館そして松前へ連行されました。ディアナ号副艦長リコルドは陸上の異変を知り艦を陸へ近づけましたが日本側から反撃を受け一旦引き戻りました。

ディアナ号は翌年再び国後沖に来航して日本側との交渉を試みましたが日本側が拒否し、困り果てたリコルドは海上を通りかかった嘉兵衛の船を捕らえました。嘉兵衛は同行を希望した5人とともにカムチャッカに連行されました。リコルドは嘉兵衛の見識や、軍船に拿捕されたにも関わらず、冷静沈着に対応する胆力に感嘆し、嘉兵衛を頼ることにしたようです。

リコルドと嘉兵衛は「一冬中に、二人だけの言葉を作って」交渉しました。嘉兵衛はリコルドに、フヴォストフの蛮行はロシア政府が許可も関知もしてないないという政府高官名義の証明書を日本側に提出するようにと説得しました。その言葉を聞き入れたリコルドは嘉兵衛を日本に帰し、嘉兵衛を両国の仲介役として交渉し、遂にゴロヴニン釈放にいたる和解を成し遂げました。写真5は「菜の花ホール」に展示されているリコルドと嘉兵衛の折衝中の像です。この像のレプリカがロシアにも置かれているそうです。像の台座には「各国それぞれ相異なる固有の習慣を有しているが真に正しきことはいずれの国においても正しきものと認められる。」と書かれています。



写真5 リコルドと嘉兵衛の像

ゴロヴニンは2年余に及ぶ日本での幽囚体験と観察からなる手記「日本幽囚記」を著しています。本書の中でゴロヴニンは、自らが囚われの身であったのにも拘らず、日本人を「世界で最も聡明な民族」であり、「勤勉で万事に長けた国民」であると好意的に評価し、それまでの「クリスチャンへ理不尽な迫害をもたらす野蛮な国民」であるというヨーロッパの否定的な日本人観を一変させました。

リコルドは「対日折衝記」の中で次のように書いています。

<[http://www.takataya.jp/nanohana/miyage/golovnin\\_2018.htm](http://www.takataya.jp/nanohana/miyage/golovnin_2018.htm)>

「日本船の全乗組員は六十名ほどであったが、船長だけが私の元へ連れてこられた。彼の立派な絹服、刀、その他の容貌は、彼が相当な人物であることを指し示すものであった。私は直ぐに、彼を艦長室へ招き入れた。彼は私に十分な敬意を表して、日本流に挨拶した。私が危害を加えるつもりはないことを示すと、彼はいとも気軽に船室の椅子に腰を降ろした。それから私は、僅かではあるが良左衛門（レオンザイモ）から習い覚えた日本語で彼に質問した。彼は、名前が高田屋嘉兵衛（タカタイ カヒ）であること、職業は船頭船持ち（シンド フナモチ）であることを告げた。」

「菜の花ホール」の前には嘉兵衛とゴロヴニンが並んだ「日露友好の像」が建っています（写真6）。平成11（1999）年には嘉兵衛生誕230年を記念してゴロヴニン事件関係者の子孫が再会してコブシの樹を植樹しました（写真7、写真8）。記念植樹の説明板には「対日折衝記」の中のリコルドの言葉「日本にはあらゆる意味で人間という崇高な名で呼ぶにふさわしい人物がいる。」が引用されています。



写真6 日露友好の像



写真7 記念植樹のコブシの樹

**高田屋嘉兵衛翁生誕230年記念植樹**

日本には、あらゆる意味で人間という  
崇高な名で呼ぶにふさわしい人物がいる。  
(リコルド著「対日折衝記」)

このコブシの樹は、「ゴロヴニン事件」関係者子孫の186年の  
時空を超えた再会を記念し、武力紛争の危機にさえあった国難を  
見事解決へと導いた先人達の偉業と平和への願いを、後世へ  
語り継ぐことを祈念し植樹したものです。

ビョートル・ゴロヴニン（ゴロヴニン副提督子孫）  
アナトリー・チホツキー（リコルド提督子孫）  
高田 嘉七（高田屋7代目）  
平成11年10月24日

写真8 記念植樹の説明板

高田屋嘉兵衛公園には都志出身の作詞家の阿久悠さんゆかりのモニュメントもあります。写真9は「瀬戸内少年野球団」の少年たちの群像と文学碑「あのとき空は青かった」です。写真10は「愛と希望の鐘」です。淡路瓦で作った「あの鐘を鳴らすのはあなた」の歌碑とともに設置されています。



写真9 瀬戸内少年野球団群像と文学碑



写真10 「愛と希望の鐘」

(おわり)

## ウエスティングハウス社とアメリカ合衆国の思い出 (8)

中谷 博 (S34/1959卒)

## 18. ジャージーシティからニューヨークへ

ジャージーシティからニューヨークのマンハッタンへ行くには、地下鉄を利用するかバスを利用するのが便利である。一度、自分の車で乗り入れたことがあったが、駐車する場所が見つげにくいのと、自動車の数が多いので大変である。したがって、大抵の場合、地下鉄かバスを利用するようにしていた。いずれも、PATH (Port Authority Trans Hudson) が運営する鉄道とバスで、ジャーナルスクエアが出発点となっている。鉄道の場合は、(写真8.1) に示すルートで運航されている。バスを利用する場合は、途中、ハドソン川の地下トンネルが二か所あり、リンカーントネル (Lincoln Tunnel) か、南側のホランドトンネル (Holland Tunnel) のいずれかを通る (写真8.2)。ニューヨークのマンハッタンの西部8th Avenue、40-42streetにあるPort Authority Bus Terminalというバスターミナルまで行くことになる。このBus Terminalは、全米各地に出発する長距離バスのアメリカで最大のバスステーションともなっている。鉄道を利用する場合は、Journal Squareの駅で列車に乗って、ハドソン川の地下トンネルを

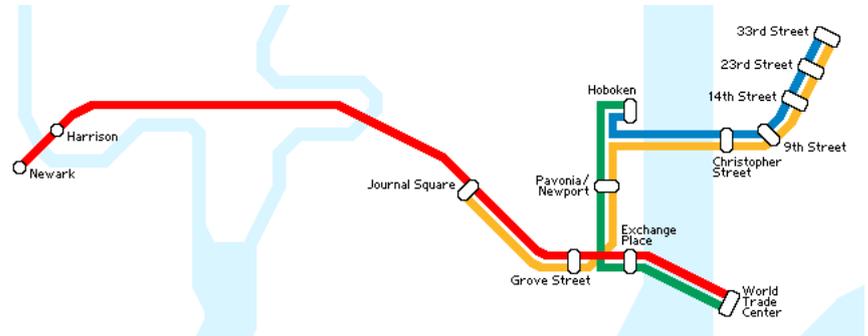


写真8.1



写真8.2

下トンネルが二か所あり、リンカーントネル (Lincoln Tunnel) か、南側のホランドトンネル (Holland Tunnel) のいずれかを通る (写真8.2)。ニューヨークのマンハッタンの西部8th Avenue、40-42streetにあるPort Authority Bus Terminalというバスターミナルまで行くことになる。このBus Terminalは、全米各地に出発する長距離バスのアメリカで最大のバスステーションともなっている。鉄道を利用する場合は、Journal Squareの駅で列車に乗って、ハドソン川の地下トンネルを

通って、エンパイアステートビル近くの33 street駅で降りる。この電車は、現在は車両も新しくなっていると思われるが、私が滞在した当時は、かなりひどい乗り心地で、電車の車輪とレールの軋む音が耳触りであった。週末になると、ジャージーシティよりもニューヨークへ出かけることが多かった。ニューヨークのマンハッタンには、非常に多くの美術館や博物館、娯楽、観光名所がある。

## 近代美術館 (Museum of Modern Art) について

この美術館は、タイムズスクエアの北、セントラルパークとの中間点にあり、モダンアートの殿堂である (写真8.3)。19世紀以降の絵画や彫刻を中心に展示されている。(2004年にリニューアルされ、当時の2倍の広さになって、展示の幅も広がっているとのことである) 私がこの美術館を訪れた1963年には、ロダンの彫刻の「カレーの市民像」が中庭に展示されていた (写真8.4)。同じく、ロダンの「バルザック像」も中庭に展示されていた (写真8.5)。館内でも数点の「バルザック像」を見ることが出来た。その他、その時はピカソの「ゲルニカ」が、無動作に通路の床に立てかけられていた。意識して見た訳ではなかったが、後になってあれは、まさしくピカソの「ゲルニカ」だったことが分かった (写真8.6)。大作ではあるが、何か奇怪で不思議な絵画を見た印象が強かった。1963年は、暫定的に「ゲルニカ」が、ニューヨークの近代美術館に保管されていた時期にあたるということが明らかで、確かに本物の「ゲルニカ」であったと思う。後に、スペイン政府からの変換要求があつて、現在はプラド美術館で展示されているとのことである。最近は、現代美術の展覧会で、何故これが芸術かと思う作品を見ることがあるが。この時も、何故これが芸術作品かと思う展示品があつた。それは、自動車の車体をプレス機械で押しつぶして、その上からペンキを塗りかけているだけの、私の目から判断すると、とても芸術作品と言ひ難いものであつた。当時は、まだ現代美術の展覧会を見る機会がなく、非常に驚いた記憶がある。



写真8.3



写真8.4



写真8.5



写真8.6

### メトロポリタン美術館 (Metropolitan Museum of Art) について

セントラルパークの東側、5th Avenueに面して、メトロポリタン美術館がある(写真8.7)。世界三大美術館の一つに数えられる巨大な美術館である。1870年に建てられ、重厚な建物と膨大なコレクションに圧倒される。当時メトロポリタン美術館は入場無料で、入館者も多くなく、ゆっくり展示品の鑑賞をすることが出来た。現在は、有料になっていて、入館者も多いらしい。なにしろ膨大な展示で、どこから見ていけばいいのか戸惑うくらいであった。まず、非常に興味のある絵画を見ることにした。画家一人当たり一室の展示になっていて、画家一人あたりの絵画の数が非常に多く、このような展示は初めての経験であった。マネ、モネなどの印象派の画家を中心に見ることにした。例えば、後期印象派の画家ルノアールの場合、裸婦像の絵画が、大きい部屋いっぱい展示されていて、圧倒される思いであった。同じく、印象派の画家のドガの「踊り子」の絵画も躍動感のある多くの画面が、広がっていて、通常の展覧会での印象と違った効果があるように見えた。特に印象に残ったのは、ルオーの絵画で、ルオー独特の強烈な表情の男の顔がこちらを睨めつけているようであった。エジプト美術のコレクションは世界有数と言われているので、ゆっくり見ることにした。中世ローマ時代の甲冑は、数十メートルにわたって展示されていて、急ぎ足で見て回ることになった。とにかく、展示されているだけでも到底一日で見ることは出来ない。所蔵されている膨大なコレクションは、300万点以上と言われているが、古今東西、幅広い時代にわたっている。



写真8.7

グッゲンハイム美術館 (Guggenheim Museum) について

セントラルパーク5th Avenueに面して、メトロポリタン美術館の北東にある、非常にユニークならせん状の外観の建物である (写真8.8)。完成したのは、1959年で、私がこの美術館に入ったのが1963年であるから、まだ非常に新しい建物であった訳である。建物の内部もならせん状のスロープになっていて、このスロープに沿って作品を展示していて、スロープの上を歩きながら、絵画を鑑賞するようになっている。ピカソ、マチス、モンドリアンやカンディンスキーなどの絵画が展示されていた。スロープの途中で、ピカソのバイオリンを題材にした抽象画が二点並んで展示されているのに目が惹きつけられた。それまで、抽象絵画はあまり好きでなかったが、何故かしばらく止まって、見入っていた記憶がある。それまでのピカソについての印象と異なって、かなり正統的な絵画だったからであった。

一階から最上階まで、エレベーターで昇ることが出来るようになっている。したがって、一階からスロープを登りながら絵画を見ることも、あるいは逆に、最上階から下りながら絵画を見ることも出来る。建物内部は、吹き抜け空間になっている。



写真8.8

エンパイアステートビル (Empire State Building) について

ニューヨークと言えば、最初に思い浮かんだのがエンパイアステートビルであった。アメリカへ来る前に、元フルブライト留学生で、ベトナム平和連合代表であった小田実氏の著書「なんでも見てやろう」で、アメリカで絶対見たいものにエンパイアステートビルとミシシッピー川があげられていた。私の想像の中で、エンパイアステートビルは、とてつもない高さの建物というイメージが膨らんでいた。当時の日本の建物は、建築基準法で、高さ31mに制限されていたから、現在のように日本国内でも、高層ビルが林立するのとは全く環境が違っていただけである。初めてニューヨークを訪れた時は、夜のエンパイアステートビルだったが、二度目は昼間に登って、ニューヨークの景観を眺めることにした。エンパイアステートビルは、5th Avenueと33-34 Street の交差点に聳えている。102階の展望デッキにエレベーターで昇った。料金は、丁度1ドルで、緑色のビルの絵柄のある小

さいキップであった。展望デッキから、マンハッタンの高層ビル群を見下ろして、写真を撮った。(写真8.9)は、PANAMビルとクライスラービルを入れて、イースト川に向かってシャッターを切った。(写真8.10)は、クライスラービルに焦点を当てた。(写真8.11)は、セントラルパークに向かってシャッターを切った。



写真8.9



写真8.10



写真8.11

### ロックフェラーセンター (Rockefeller Center) について

ロックフェラーセンターの中に聳え立っているのが、RCAビルであった(写真8.12)。(現在は、所有者が変わってGEビルになっている) RCAビルの70階にある展望台から、エンパイアステートビルが手に取るように見える(写真8.13)。ロックフェラーセンターの東側には、5 Avenueに面して、カトリックの大聖堂「St. Patrick Cathedral」が聳えている(写真8.14)。ロックフェラーセンターの一角、6 Avenue と50 Streetの交差点にラジオシティミュージックホール (Radio City Music Hall) がある(写真8.15)。約6000人収容のホールで、ラインダンスショウ(写真8.16)の後に、音楽演奏の他バレエの上演、ミュージカル映画など、盛り沢山のエンターテインメントがあって、当時普通の席の料金5ドル程度で楽しむ

ことが出来た。この劇場の売り物でもある、数十人のダンサーの一糸乱れぬラインダンスの後、鈴の音を用いた軽快な音楽演奏の他、短い美しいバレエも上演された。最後の映画は、「バイ バイ バーディー」というミュージカル映画であった。ブロードウェイミュージカルの映画版で、スエーデン系アメリカ人女優、歌手でダンサーのアン マーグレット主演で、若く澁刺とした動きと歌声が、画面いっぱいになった楽しい映画であった。



写真8.12



写真8.13



写真8.14



写真8.15



写真8.16

## タイムズスクエア (Times Square) について

42nd Streetと7th Avenue、さらにBroad Wayが交叉する所がTimes Squareの中心に位置する。ブロードウェイミュージカルが上演されている多くの劇場がある地域の中心にあたる。タイムズスクエアの建物外壁には、ビルボードが多く設置されていて、世界中の企業の広告やディスプレイが多い。私が滞在した頃は、タバコのCamelの広告が目立っていたので、今も記憶に残っている。当時タイムズスクエアの一角に、ラテンクオーターというナイトクラブがあった。タイムズスクエアから出発するバスの中に、ナイトクラブツアーバスもあって、2、3箇所のナイトクラブを巡るが、ラテンクオーターでは、大掛かりなマジックショーがあった。この時は三菱電機の手代木君が、インディアナ州ブルーミントン工場での研修を終えてニューヨークに来ていたので一緒にこのバスツアーに参加した。ラテンクオーターの食事のテーブルで、日系人の夫妻とたまたま隣り合わせになり、日本語での会話がはずんだ。シアトルに住んでいて、ニューヨーク観光に来ているということだった。

## マディソンスクエアガーデン (Madison Square Garden) について

マディソンスクエアガーデンは、1963年当時、8th Avenueと49-50 Streetにあった。(1964年から現在の8th avenue 31-33 Streetに移転している) 多目的のイベントが行われるスポーツアリーナおよびエンターテインメント会場である。私が最初にマディソンスクエアガーデンへ行ったのは、「アイスカペード」(Ice Capades) のTraveling Ice Skating Showの時であった。Holiday on Iceなどは、日本でもよく知られていたが、「アイスカペード」はアメリカへ来るまで聞いたことがなかった。Ice Skating Showは、非常に華やかで、特に集団で滑るスケートやアクロバティックなショーは楽しく、その後も、2回ほど見に行った。サーカスのショーも日本で見るサーカスよりかなり規模が大きく、迫力があつた。その他、ボクシングはヘビー級のボクサーの試合を見ることが出来た。

### 19. ニューヨークで見かけた思いがけないこと

ニューヨークの街を歩いていると、小銭を入れた缶を、カタカタ音をたてている男や、黙って突っ立って小銭を要求する男を見かけることもあつた。私自身五番街を歩いていると、大の男にダイム(10セント硬貨)を要求されたことがあり、

大変驚いた。別に強要される訳ではないので、断ればよいだけではあるが、奇妙な光景である。なぜ働かないのか、不思議に思った。セントラルパークを歩いていると、必ず見かけたのが、天気の良い昼間に、ベンチに腰かけて、所在なく一日過ごしている多くの老人がいたのが気になった。一見豊かに見える社会の、暗い一面を見たような気がした。セントラルパーク周辺では、騎馬警官が見回っていた。犯罪が多いのは当時でも同じで、出来るだけハーレムなどには近寄らないようにしていた。昼間のニューヨークは、あまり問題ないように見えるが、夜は注意が必要と思われた。夜ダウンタウンのグリニッチビレッジに出かけたことがあった。帰るとき、当時の地下鉄の入り口は薄暗く、何か事件が起こりそうな雰囲気を感じさせていたのが強く記憶に残っている。

ニューヨークへ来たばかりの頃、別に目的もなく地下鉄に乗ったことがあった。タイムズスクエアの駅で乗車して、ダウンタウンの方向に向かって電車が走っていたが乗客の中の黒人の割合が、次第に増えていった。ブルックリン橋を渡る頃には、ほとんど黒人ばかりになったのは、非常に異様な体験であったが、住民の構成状況から見て当たり前のことかもしれない。逆に、ブルックリンから引き返すと、電車が進むにしたがって黒人の人数が少なくなった。

ニューヨークやニューアークで、2、3度タクシーに乗ったことがあったが、ドライバーの対応が地方都市のドライバーとはかなり違うように思った。ピッツバーグで、数回タクシーに乗る機会があったが、陽気なドライバーに出会うことが多く、中南米からアメリカにやって来てタクシードライバーをしているとのことで、アメリカでの生活に満足していて、一方的にしゃべっていた。ニューヨークやニューアークの場合、私の少ない経験では客への対応がかなり悪い印象が強い。経路をごまかされたことに後で気づいたことがあった。

ニューヨークの市内へ自分の車を運転して、乗り入れることは数回程度であったが、一度、ブルックリン地区に乗り入れて、コニーアイランドとロングビーチの付近をドライブしていたことがあった。夏の時期で、週末の土曜日だったので、海水浴の客が多く、道路が渋滞していた。前進と停止を繰り返していた時、ついさっき前の車のバンパーに自分の車の前のバンパーを接触させてしまった。近くを走っていたパトカーがすぐやって来て、事故の事務処理はすぐ終わった。非常に軽微な傷が、相手のバンパーについた程度で、ほとんど分からないくらいであった。それでも、相手が悪かった。何とか保険金を取ろうとして、首が痛い

か、因縁をつける3人の海水着姿の連中が乗った車であった。警官の方は、以前、日本に行ったことのある元GIで、事故に関係のない日本の話をしていた。いずれにしても、保険会社に処理を任せることにして、その場を立ち去った。数日後、Hartford保険会社の人 YMCAへやって来て、事故状況についての話を聞いていった。車のLicenseも登録も住所はピッツバーグになっているので、事故の書類は、最初の下宿に届いたようであった。下宿のグレースおばさんが、びっくりして三菱電機の高木駐在員の所へ持って行ったので、駐在員から社内私送便で連絡があり、如才なく処理しただろうが、いくら軽微な事故でも、必ず駐在員に連絡するよう注意された。通常は、事故が無い場合は、なにがしかの金額の返還金(Refund)があると聞いていたが、私の場合は返還金がなかった。

映画を見ることは、ピッツバーグやバッファローでは全く無かったが、ジャージーシティーやニューヨークでは、時々見るがあった。ニュース映画で、当時のケネディー大統領が画面に現れると、観客が一斉に拍手するのが、新鮮な驚きであった。通常は、大統領や政府高官に敬意を払うようである。トランプ大統領の場合、どんな反応をするのか興味がある。

(次号に続く)